外国の薬学史：総論（10＋1項目），各論（46項目）
外国の医療史：各論（39項目）
巻末の付録：年表，博物館・資料館など一覧，索引

薬学の歴史を考えるときに，その時代の医療との関わりを無視することができないのはもちろんだが，医学が薬剤の進歩と深く関わりながら発展してきたことには，意外なほどに注意が払われていない．

西洋医学は19世紀に入ってから大きく変貌し，基礎医学と臨床医学に分かれて急速にかつ加速度的に進化し，現代の先進的な医療が生み出された．その19世紀の医療・医学の変革については，かつてフーコーが「臨床医学の誕生」と表現し，病理解剖学と実験生理学の発展といったモーメントが指摘されている．しかしながら，18世紀までの西洋医学で用いられていた薬剤は，他の伝統医学と同様におもに植物薬であった．植物から薬効成分を抽出する試みは，18世紀末のジギタリスから始まり，19世紀初頭あたりから本格化してさまざまなアルカロイドが抽出され利用されるようになった．さらに有機化学の発展に伴い，19世紀末からアスピリンを始めとする化学合成薬が開発・販売されるようになった．薬理学の祖とされるシュミーデベルク Schmiedeberg, Oswald（1838–1921）がシュトラスブルク大学に薬理学研究室を設立したのは1887年である．抽出・精製ないし化学合成により作られて純粋な成分からなる薬剤と，薬理学によるその作用の検証なくして，現代医学が成り立たないことは言うまでもない．

本書『薬学史事典』が医史学を研究する人たちにも有用な情報源であることの由縁である．

（坂井　建雄）

［薬事日報社，〒101-8648 東京都千代田区神田和泉町1番地，TEL. 03（3862）2141，2016年3月，B5判，880頁，12,000円＋税］

川端美季 著
『近代日本の公衆浴場運動』

近代日本の都市の公衆浴場に関する本格的な研究である．いわば風俗史・文化史的関心から，江戸時代に庶民の養生や社交の場として栄えた湯屋が紹介されることはこれまでもあったが，本書では明治から大正にかけての公衆浴場について，文化史的側面のみならず，法的，経済的，社会的そして保健衛生の側面にも目を配りながら，興味深い歴史が描かれている．江戸時代からの連続性の一方で，西洋の public bath 運動からの影響についても言及されている．

本書の後半では，大阪・京都・東京の3都市における公設浴場が取り上げられ，救貧や部落改善運動などとも関わる都市政策・社会事業としての重要性が，その問題点とともに明らかにされている．東京における関東大震災後の仮設浴場にかんする分析を読むと，現在においても震災後の対応として罹災者の入浴の問題が重要であることについて考えさせられる．

医史学的関心からは，石黒忠悳（陸軍軍医総監）をはじめとする医師たちの入浴の効用・効能にかんする見方や，細菌学興隆以降の明治後期になると，公衆浴場の水質にかんする懸念が『大日本私立衛生会雑誌』において議論されていることなどが，とくに興味深い．

以下に目次を紹介しておこう．

序章
第一章　湯屋の法規制の変遷―江戸期から明治期を中心に
第二章　清潔にする場としての浴場―衛生的側面の導入
第三章　社会事業としての公衆浴場―日本における公設浴場の成立
第四章　社会事業行政における公設浴場の位置

づけ―大阪市を事例に
第五章　京都における公設浴場の設立
第六章　東京における公設浴場の設立
終章

通読すると，本書が公衆浴場をレンズとして，日本の「近代」そのものを論じていることに気づく．著者は「あとがき」において，「公衆浴場というテーマは当初思い描いていた以上の，また想像してもいなかった多様な景色を見せてくれるものであった」と述べている．本書によって，読者もまた，そんな公衆浴場の歴史の景色の広がりを見ることができるであろう．

（永島　剛）

［法政大学出版局，〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-3，TEL. 03（5214）5540，2016年8月，A5判，320頁，5,800円＋税］

加藤四郎 編著
『小児を救った種痘学入門――ジェンナーの贈り物――』

緒方洪庵記念財団・除痘館記念資料室撰集として発刊された『小児を救った種痘学入門――ジェンナーの贈り物――』を紹介します．本書は加藤四郎著『ジェンナーの贈り物――天然痘から人類を守った人――』（菜根出版，1997年）を増補復刊したものである．加藤四郎編著とされている本書について，前著の復刊を強く願った加藤四郎さんが2015年9月に逝去されたのちとなった経緯を，緒方高志財団理事長が記している．緒方洪庵記念財団・除痘館記念資料室が，前著の内容を約18年の間の科学の進歩を踏まえて一部修正した第一部と，新たに加えた第二部よりなる．第一部のあとがきとして加藤四郎さんは「本書は小学校高学年および中学生向けに書いたものです．第二次世界大戦前（昭和二〇年以前），日本ほどジェンナーの伝記について広く知られていた国はありませんでした．日本におけるジェンナーの知名度は，イギリス以上であったといえます．……」と述べている．紹介者は，今日，医療系の大学新入生のうち牛痘種痘の開発者ジェンナーを答えられる者は数％しかいないことを最近聞きました．本書を読んでほしいとして加藤さんが書いた本書を小中学生に薦めても，理解して読んでもらうことは相当難しい時代になっていると考えます．むしろ大学生や，新しく医史学を学ぶ方にも読んでほしい内容であると考え紹介します．第一部にはウイルス学者の加藤四郎さんがジェンナーの事跡，博物館，ジェンナー像を訪ねる旅と，WHOの「全世界天然痘根絶宣言」に至る歴史が多数の図，写真とともに述べられている．

第二部は「幕末日本の蘭方医たち――天然痘との闘い――」として，次の各項よりなる．

1. 楢林宗建（米田該典）
2. 伊東玄朴（古西義麿）
3. 笠原良策（浅井充晶）
4. 緒方洪庵（浅井充晶）
   《コラム》大阪除痘館の種痘場風景（川上潤）
5. 桑田立斎（古西義麿）

末尾の年表・文献を含めて160頁の小著であるが，広く読んでいただきたい好著が再版された．紹介者は前著『ジェンナーの贈り物』を幸いにも古書として入手し保存しているが，書棚の中でほこりをかぶることなく輝いている本です．

（渡部　幹夫）

［創元社，〒541-0047 大阪市中央区淡路町4-3-6，TEL. 06（6231）9010，2016年8月，四六判，160頁，2,000円＋税］